

良寛さまは、江戸時代後期の曹洞宗の僧侶です。

その姿や、伝え聞いたさまざま逸話を記した『良寛りょうかんぜんじきわ禅師奇話』の中に、次のようなものがあります。

「良寛さまは、わが家に来られて二晩かそれ以上、泊まっていかれた。そんな時は、何となく家中が和やかになり良寛さまが帰られたあとも、数日間は、家の者はみな明るく打ちとけていた。良寛さまと一晩でも一緒にいると、心が洗われて澄みわたっていくように思われた・・・。」

むずかしい話やお説教めいた話をしたわけではなく、台所のかまどの火加減を見たりなど家の手伝いをしたり、ある時は座敷で坐禅をするといった過ごし方だったようです。ことさら僧侶らしくしているわけでもないのに、良寛さまがそこにいるだけで、みんなが和やかになり、すがすがしい気持ちになったというのです。

良寛さまが生まれたのは、新潟県出雲いすもざき崎の名主をつとめる家でした。幼少の頃は、人との交流よりは、本を読むことを好む少年でした。敏感な感受性を持っていたようです。長男であった良寛さまは、十八歳になり名主見習いを務めるようになりましたが、世間にうとかったためか、出雲崎の代官と領民の争いの仲裁に入った時に、両者の悪口を、そのまま相手に伝えてしまい、一層事態を悪化させてしまいました。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

名主職をつとめることはできないと感じた良寛さまは、出家をします。

岡山県の^{えんつうじ}円通寺の^{こくせん}国仙和尚のもとで、十三年間修行をしました。国仙和尚の修行は、坐禅やお掃除をひたすらに行う実践第一のものでした。良寛さまは、愚直に修行を続けたようです。良寛さまの号が大いに愚かと書く「大愚^{たいぐ}」。また、良寛さまにあてた国仙和尚の漢詩の中に「良寛は愚かな者のごとく」とあります。この場合の「愚か」というのは、「愚かな者に見えるくらい、真面目に誠実に修行をする」という意味です。

良寛さまは、円通寺での修行を終え、故郷に戻ってからも、たゆむことなく愚直に修行を続けました。味噌や醤油が発酵によって、おいしい味となるように、感受性豊かな心に修行が加わることによって、内面の力が深まっていったのでしょう。良寛さまの魅力は、修行によって育まれたものだったのです。

『良寛禅師奇話』の中に・・・

「良寛さまは、常に言葉が少なく、その立ち居振る舞いはしとやかで奥ゆかしく、余裕をもったものだった」

「良寛さまの声は、明るく伸びやかであった。読経の声が心の耳に響いた。その声を聞いた者は、おのずから信じる心がおこった」と記されています。

「一度お会いしてみたかった」そう思わせる良寛さまのお姿です。

— 終 —